



University of the Ryukyus Library Bulletin Vol.33 No.3 (No.127) July 2000

「琉球語音声データベース」について

狩俣 繁久

危機に瀕する言語

中国語や英語のように母語話者の数が数億人という大言語から、話者が数人あるいは一人しかいない少数民族の言語まで含めて世界中の言語の数は6千とも7千ともいわれるが、その大半が21世紀の終りまでに消滅するのではないかといわれ、最悪の場合有力な大言語を残し、9割以上の少数言語が話されなくなるのではないかと危惧されている。その消滅のスピードは、自然破壊や稀少生物の絶滅を上回るとみる研究者もいる。言語が消滅するというのはどういうことだろう。辞典や文法書、テキスト、あるいはカセットテープに言語が登録されたり記録されたりしても、その言語の話し手がいなくなり、生きて使われなくなれば、消滅したことになる。

言語が消滅の危機に瀕するとはどんなことだろう。宮岡伯人(1999)は、次のようにいう。

言語の危機度を占うのは、話し手の数ではない。重要なきめては、子どもが母語として習得しているかどうかであろう。母語としての習得がストップすることは、継承の糸が切れることであり、繁殖能力のなくなった生物種にたとえることができるかもしれない。

- ①「絶滅の運命にあるmoribund」言語。子どもがすでに母語として習得しなくなった言語。
- ②「危機に瀕したendangered」言語。子どもがまだ母語として習得しているが、現状のままでは二一世紀末までに①の仲間入りをする可能性があると考えられる言語。
- ③「安泰なsafe」言語。将来にわたって確実に話されつづけるだろう言語。

目次		目次	
「琉球語音声データベース」について		図書館映画会	
.....狩俣繁久	1	文献複写依頼はWebILL依頼で	6
図書館の係編成が変わりました	5	お知らせ	8

附属図書館のホームページ (<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/>) もご覧下さい。

危機言語のほとんどが世界各地のマイノリティーの言語であり、これまでマイノリティーの人々は差別され、迫害されてきた。しかし、価値観が変化し、マイノリティーの文化が見直されつつある。しかし、民具や工芸品のような物質文化や、芸能や歌のような様式をもった文化にくらべて、言語は複雑なシステムで、継承がむづかしいのである。

明治12年に沖縄県として日本にくみこまれるまで460年間も独立国として繁栄していた琉球王国の言語としての琉球語（琉球方言ともよばれる）も、若い世代への継承がなされず、伝統的な琉球語を第一言語にする話者の他界と高齢化によって存続が危ぶまれているが、琉球語は、さきの①②③のいずれに属するのだろうか。いまの沖縄の子どもたちが琉球語を話すことはおろか聞いて理解することもできないとするならば、どんなに楽観的にみても②危機に瀕しており、かぎりなく①に近く、このままの状況がつづけば絶滅の運命にあるといわざるをえないだろう。

沖縄言語研究センター（代表上村幸雄琉球大学名誉教授、現沖縄大学教授）では20年以上も前に琉球語の危機的な状況を憂慮し、琉球語の組織的な研究と記録・保存をはじめた。1979年から始まった、琉球列島のすべての伝統的な集落の方言を調査するプロジェクトのほかに、琉球語の音声そのものを記録保存する仕事を1988年からはじめ、1989年からは文部省科学研究費重点領域研究「日本語音声」（研究代表者杉藤美代子）の琉球列島班（代表者上村幸雄「琉球列島の音声の収集と研究」）の仕事として行った。

そして、そのときの成果をもとに平成10年度から文部省科学研究費を得て取り組んでいるのが「琉球語音声データベース」（研究代表者石川友紀琉球大学附属図書館長）である。この研究計画には、附属図書館研究開発室の高良富夫（工学部教授）、大胡太郎（法文学部助教授）、名嘉順一（元琉球大学教育学部教授）、そして狩俣が研究分担者として参加しているが、いずれも沖縄言語研究センターのメンバーである。研究の目的は今帰仁方言音声データベースと首里・那覇方言音声データベースを琉球大学総合情報処理センターの大型コンピュータを利用して、琉球大学附属図書館のホームページ

(<http://ryukyu-lang.lib.u-ryukyu.ac.jp/>) 上で公開するものである。

今帰仁方言音声データベース

今帰仁方言音声データベースは、『沖縄今帰仁方言辞典』（角川書店、1983）の全項目（約1万3千語）とその用例について録音した音声をデータベース化し、それを辞典の文字資料とリンクして、琉球大学附属図書館のホームページ上ですでに一般に公開しているものである。

『沖縄今帰仁方言辞典』（以下『辞典』と略）は、仲宗根政善（琉球大学名誉教授、沖縄言語研究センター初代代表、1908-1995）が故郷の今帰仁村字与那嶺の方言をまとめたものである。今帰仁方言は、琉球王朝が成立する以前、各地に豪族が割拠していたころ、沖縄本島の北半分を支配していたといわれる北山の居城のあった地域の方言である。今帰仁方言に代表される北部方言は、奈良時代以前の日本語が有していたとされるハ行子音のp音を保持するなどの古い特徴がみられ、首里那覇の方言を中心にする中南部方言と大きく対立する方言である。

仲宗根先生は、この『辞典』の出版と長年の琉球方言研究が認められ、1983年に日本学士院賞を沖縄出身者としては初めて受賞されている。沖縄言語研究センターでは、この『辞典』の全項目と用例を1988年から約3年間かけてDAT（デジタルオーディオテープ）37巻に録音した。話者は仲宗根先生の若い頃からの親友仲里源盛（故人）と山内光子で、録音作業は仲宗根先生のご自宅で島袋幸子が行った。

「琉球語音声データベース」では、約2万6千項目の男女の音声の切り出しを島袋幸子が行い、外間美奈子（沖縄言語研究センター）、五内川芳麻（琉球大学人文社会科学研究科大学院生）が^(株)国際システム（本社那覇）の協力を得ながら文字データとのリンクと確認作業を行った。この作業には1998-99年度の2年間かかった。

首里・那覇方言音声データベース

首里・那覇方言音声データベースは、国立国語研究所編『沖縄語辞典』をもとに、首里方言(用例も大幅に増補)、那覇方言も追加し、一般利用者の利便を考慮してカナ文字表記を併記したものを作成し、その全項目と用例をDATで録音し、文字資料とリンクさせて、今年度末までに全面公開するものである。

『沖縄語辞典』は、国立国語研究所に持ち込まれた島袋盛敏の原稿をもとに、当時国研の所員だった上村幸雄が島袋盛敏、比嘉春潮の協力を得ながら整理し直して、1963年に刊行されたものである。『沖縄語辞典』には琉球王国の都があった首里の土族男子の方言が収録されていて、琉球語を代表する方言の辞典である。

『沖縄語辞典』は長らく品切れ状態にあったが、多くの人々の要望によっておととしの1月に増刷された。しかし、一ヶ月足らずで売り切れてしまい、さらに増刷されたが、それもすぐに品切れになって、手に入らない状態が続いている。政治経済の中心地であった首里、那覇の方言は、琉球語全体の共通語的な役割を果たしてだけでなく、首里、那覇を中心とする中南部地域が人口の上からも琉球列島全体の7割以上を占めていて、その意味でも中南部方言は重要な方言なのである。

沖縄言語研究センターでは那覇市教育委員会委託事業「那覇市方言記録保存」の一環として、1988年から『沖縄語辞典』の全項目を見直し、現在でもその語を使用するかどうか、語形や意味に変化がないかなどの確認を行った(協力者久手堅憲夫、伊狩典子)。また、隣接する那覇方言との異同の確認(福地唯方)と、民俗語彙を中心にした那覇方言の追加(崎間麗進)を行った。

首里・那覇方言音声データベースでは、首里出身の久手堅憲夫、仲里政子のお二人に新たに用例を作ってもらいながら、語形や意味の検討、語彙の追加などを行い、さらにお二人の音声をDATに録音している。また、那覇方言に関しては崎間麗進氏の音声を録音している。録音には外間美奈子、仲村優子(沖縄言語研究センター)、仲間恵子(沖縄言語研究センター)があたり、沖縄県立芸術大学附属研究所のスタジオを利用させてもらった。

百見は一聞にしかず

どんなに正確な発音記号をもってしても、実際の音声にはかなわない。それは当然のことではあるが、実際の音声を多くの人が利用できるメディアで、しかも大量に提供するのには困難であった。しかし、近年の技術革新がそれを可能にしている。ホームページを開設し、インターネットを利用すれば、誰でも(特に若い人に)どこからでも音声付の辞書がひけるのである。話者が少なくなってしまった、とりわけ文字に書き表しにくい音声を有する言語の場合、音声とともにデータベース化し、インターネットを通して公開するのは、危機言語の記録保存と継承(学習)のための方法としてたいへん優れている。

「琉球語音声データベース」では、標準語からでも、方言からでも検索できる。さらに、動物、植物、地名、料理、遊戯といった意味分野別の検索も可能である。また、動詞、形容詞、副詞、感動詞などの品詞別の検索もできる。音声も16bit11kHzと16bit48kHzの2種類を用意してある。前者はダウンロードの時間を短くできるようにしたもので、後者は音質を重視する研究者向けのものである。研究者向けには一般向けよりも検索方法のメニューを増やしてある。

一般向けが誰でも利用できるのに対して、研究者向けはあらかじめ登録してもらってパスワードでアクセスしてもらうことになっている。この研究者向けページを設けたのも本データベースの特色の一つであろう。

参考：宮岡伯人(1999)「危機に瀕した言語—崩れゆく言語と文化のエコシステム」(『月刊言語』1月号)

(かりまた しげひさ：琉球大学法文学部教授)

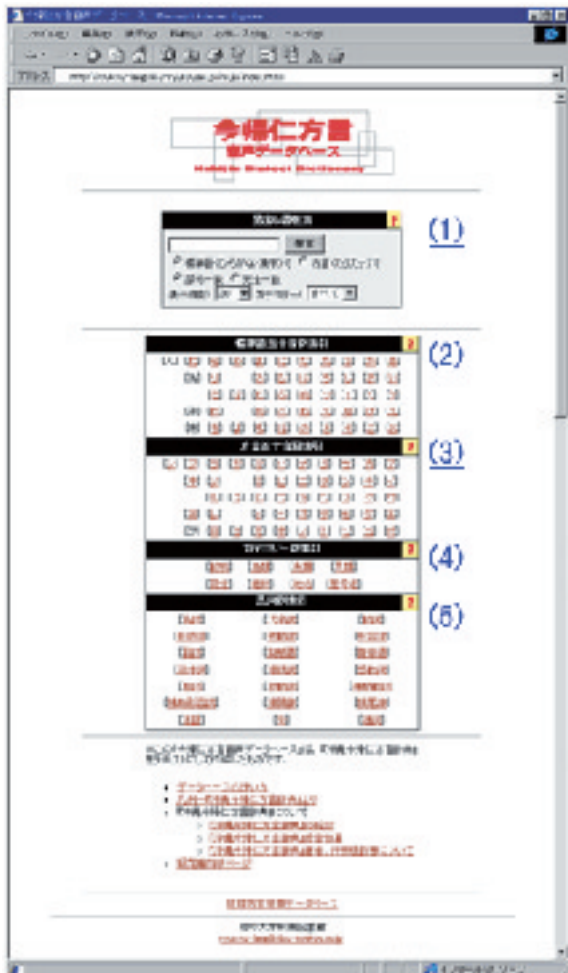
～琉球語音声データベースの使い方～

● 琉球語音声データベースへのアクセス

図書館ホームページ <http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp> にアクセス、「電子化資料と図書館活動」→「学術資料集」→「琉球語音声DB」をクリックする

琉球語音声データベースのメインページから、それぞれの方言データベースをクリックすると、方言検索のための画面がでてきます

(アクセス経路がわかりにくい時は、Site Mapを参照してください)



琉球語音声データベースでは次の方法によって、収録されている方言を検索することができます。

(1) 見出し語検索

検索文字を入力して検索する。
検索のために入力して文字が「部分一致」か「完全一致」か、選択することができます。

● 方言から検索する

方言音声から検索する場合は、探したい方言（単語）をカタカナ（全角）で入力し、検索ボタンをクリックしてください。

● 標準語（日本語）から検索する

標準語から検索する場合は、標準語をひらがな、または漢字で入力し、検索ボタンをクリックしてください。

検索機能の他に、下記の索引も用意されています。

(2) 標準語五十音別索引

(3) 方言五十音別索引

(4) カテゴリー別索引

標準語に訳するのが難しい方言や標準語で対応する単語がよくわからないときの手がかりにもなります。
たとえば、「動物」をクリックすれば、データベースに収録されている「動物」に関する方言の一覧が表示されます。

(5) 品詞別索引

標準語に訳するのが難しい方言や標準語で対応する単語がよくわからないときの手がかりにもなります。
たとえば、「名詞」をクリックすれば、データベースに収録されている方言のうち、「名詞」の一覧を表示します。

見出し語検索の一例（完全一致と部分一致を選択できる）

